

キーワード4 肯定的な見方

Hさんとけんかをし、「ばかにしやがって。」「絶対に許さない。」と大きな声で怒りを表していたIさん。担任のJ教諭があわてて間に入った。

J教諭：「Iさん、どうしたんだい。」

Iさん：「もういいや。」

J教諭：「もういいのかい？」（しばらくその感情を受けとめ）

「もういいやって思うことで、気持ちを落ち着けようとしているんだね。Hさんとの間で、何があったのかな？」

Iさん：「ぼくが借りている本を、Hがとっちゃったんだ。次に貸してと言う人がいるのに…。」

J教諭：「急にとられたので怒っちゃったんだね。」

Iさん：「Hさんだけじゃなく、他の子だって、いつもぼくのことをばかにしているんだ。だから、いつもけんかになるんだ。」

聞いているうちに、今日の出来事だけではなく、日ごろから友達とのかかわりの中で、怒りを表出してしまう自分の姿が語られた。

そこでJ教諭は、Iさんと怒り方について一緒に考えた。

J教諭：「本をとられちゃったら、何と言ったらいいんだろう？」

Iさん：「返してって言えばいい。」

J教諭：「声の大きさはどのくらい？」

Iさん：「普通の方がいい。」

J教諭：「じゃあ、練習してみようか。」



この事例では、怒りで感情をコントロールできなくなった子供に対して、まずは怒りを受けとめ、その後肯定的な見方でかかわりながら、自分を振り返らせています。

精一杯の自己表現

事例のような怒りは、一般的には好ましくないということになります。しかし、見方を変えると、いろいろな感情をもった子供が精一杯自己表現している姿ともいえます。このようなとき、教師が否定的な見方から頭ごなしに叱責するのではなく、肯定的な見方で子供に適切にかかわることが大切です。それによって、トラブルを子供の成長につなげることができます。

肯定はエネルギーの源

「肯定」は、そのまま価値ある存在として認め、ここに生きている姿を尊ぶことが出発点です。ところが、問題を起こす子供たちの多くは、自信がない、人から嫌われているのではないかと否定的な自己像をもっています。こうした自己像は、いろいろな問題を起こすたびに強められていきます。そこから立ち直るためには、「そのままの姿をそのまま認められている。」「温かさで包まれている。」「好かれている。」「必要とされている。」など、人からの肯定的な評価が十分与えられることが必要です。

ただ、子供一人一人に達成すべき課題（めあて）があります。「そのままに受け容れる」肯定的な見方から出発はしますが、子供が現在の課題を発見し、次の一步を踏み出せるように、教師が援助していくことも大切です。